



桜園通信 1. 平成 25 年 6 月

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター



2013 年 6 月、東京都健康長寿医療センターは、新築落成し、新施設で高齢者医療に新たな一步を印しました。

センターの前身は、東京都老人医療センター+東京都老人総合研究所、その前は、昭和 47 年に建設された東京都養育院附属病院+東京都老人総合研究所です。更に遡ると、今から 140 年前の明治 5 年に本郷に創設された養育院ということになります。時代の要請に応じて医療・福祉の多方面に展開していったその歴史は、日本の近代医療・福祉の歩みそのものです。

新施設の出発に当たって、入り口の円筒ガラス空間の 2 階に、養育院・渋沢記念コーナーが設けられています。くつろぎの空間、来院者の健康に関わる情報提供のための図書室とともに、養育院の歴史と健康長寿医療センターの展望を示す展示を用意しました。『養育院・渋沢記念コーナー』と名付けられるこの空間の成り立ちについてご理解頂くために、桜園通信を出発させました。養育院は、昔から、桜の名所であり、院内の彼岸桜が咲き始めた 3 月にこの冊子を出発させたことから、桜園通信と名付けました。応援の意味も込めています。

渋沢栄一銅像、養育院本院跡碑、小公園、外構の桜などの樹木と一体となった空間を考えており、ヒポクラテスの木の苗も植樹予定です。また、一般向けの図書コーナーと、専門家向けの老年学情報センター（3 階）と連携した運営となります。なお、センター 1 階ホールには、山口晃画伯による『養育院幾星霜之図』と題する壁画が飾られています。円筒部分の一階は、カフェ ドクリエが喫茶部門を営業しています。また 2 階には、売店グリーンリーブス、食堂ビアンモールを営業しています。合わせてご利用ねがいます。

老年学情報センター
(職員専用図書室)

渋沢栄一銅像
養育院本院跡碑
小公園
敷地の桜並木

養育院の歴史と展望・パネル、展示
なるほど！からだラウンジ

院内のくつろぎ
休憩スペース



養育院・ 渋沢記念コーナー

者の意図、老年学情報センターが提供する、患者・患者家族の健康問題及び高齢者の生活に役立つ老年学の知見を紹介するコーナー、養育院の歴史に関する展示コーナーとの 3 つの役割を合体させたものです。パネ

病院のシンボルの癒し空間を提供する設計

ル・図書の閲覧のほか、インターネットの利用、視聴覚メディアや立体模型、手で触れる・動かすハンズオン展示など複数のメディアで情報提供を行っています。また、食堂や売店にも隣接した明るいホールであり、呼び出し番号パネルを設置した休憩・待合コーナーとしての機能をもたせます。なお、図書コーナーの内扉、ホール柱の基部には、敷地内にあった桜を素材として再利用しています。

展示内容：・常設壁面パネル展示「引き継がれる志」逐次、説明のためのパンフレットを用意します。

- ① 養育院の系譜イラスト
- ② 養育院掟書初款：明治6年2月、上野の養育院恒久施設開院の時、用意されていた利用者の約束事の冒頭に、大久保一翁府知事が追記。
- ③ 養育院・渋沢記念コーナの入口サイン：
- ④ “養育院”とは？：時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開していった様子を示す。
- ⑤ 江戸の福祉と医療：小石川養生所、松平定信の七分積金、安政の改革と蕃書調所、病幼院創立意見、長崎養生所、パリ万博使節団に言及。
- ⑥ 養育院と東京府病院：大久保一翁府知事時代に設立。
- ⑦ 大久保忠寛（一翁）と渋沢栄一：両者の関係に言及
- ⑧ 養育院、冬の時代：養育院の維持、発展に尽力した渋沢栄一。
- ⑨ 養育院の発展に貢献した人々。安達憲忠、入沢達吉、光田健輔について。
- ⑩ 養育院の看護：拝志よしね、瓜生岩このこと。看護教育の歴史
- ⑪ 第二次世界大戦と戦後復興：塩原疎開、空襲、戦後の用地縮小について。
- ⑫ 高齢者医療・福祉の展開：1972-2009の三位一体の高齢者医療・福祉の展開。
- ⑬ 新施設オープン：新センターの運営理念
- ⑭ 時代の求め、社会の求めに応える志：鹿鳴館のバザー、様々の寄付、船形の磨崖碑
- ⑮ 展示：松平定信の吉祥天心願書と渋沢栄一の讀、渋沢栄一86歳の書、入澤達吉：老人病学（世界初の高齢医学教科書）など



なるほど！ からだラウンジ

複数のメディアにより疾患や治療の理解を深めるための場として、また、生活情報として役立つ老年学の知識、病院部門および研究部門各所が作成した一般向けの業務案内・イベント広報・健康管理情報を提供します。
また、読書の楽しみとしての図書（小説等）も今後、置いていきます。

- ・図書の閲覧・貸出
病気と治療に関する一般向けの解説書など
- ・映像資料の視聴：健康番組DVDなどを設置PCで視聴（準備中）
- ・インターネットの利用：コイン式パソコンでインターネットが使えます。
- ・からだのしくみや疾患の状態の理解に役立つ立体モデル等の展示（準備中）。
- ・院内報「糸でんわ」や病院部門各科作成のパンフレット等の配布、研究部門作成の健康管理情報ポスター掲示、老年学公開講座テキストの閲覧、イベント広報のためのチラシ配布・ポスター掲示など



図書の利用

- 平日 10:00～13:30
- コーナー内では、自由に読書できます。
- 本のコピーをしたい場合は、売店のコピー機をご利用ください。
- 患者様とご家族の方には図書の貸出もしています。
- 貸出冊数は、何冊まででもOKです。
- 貸出期間の目安は2週間以内としていますが、多少おそくなくてもけっこうです。
- 本の返却の際に、係員が不在のときは、返却用ボックスに本を入れてください。



コーナー内は飲食OKです。
待合・休憩・談話コーナーとしてもご利用ください。



コーナー内では、携帯電話のご利用は可といたしますが、声がひびきやすい場所なので、他の方にご迷惑がかからないよう、ご配慮ねがいます。

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先：老年学情報センター

【養育院本院】碑について

東京都健康長寿医療センターは、『養育院』の流れを汲む組織であり、昭和 61 年までは『養育院附属病院』、以後平成 21 年までは『老人医療センター』と称しました。平成 21 年 4 月からは、地方独立行政法人・東京都健康長寿医療センターとなりました。平成 25 年 3 月、新施設開設に先立って、敷地内の渋沢栄一銅像の前に、『養育院本院』碑が建てられました。元職員を中心とする、『養育院を語り継ぐ会』によるもので、重量 1.98 トンの御影石の石碑です。碑の題字には、養育院の維持・発展に 50 年以上も尽くした、社会事業にも熱心な日本経済の父・渋沢栄一の墨跡を用いました。養育院の原資となった七分積金制度を作った松平定信の心願書と、彼をたたえる渋沢栄一の書が、旧養育院長室に掲げてありましたが、そこからとったものです。はめ込んである金属板の碑文に『養育院』のいわれが書いてあります。



養育院本院の碑 碑文

養育院は、明治五（千八百七十二）年十月十五日に創設された。維新後急増した窮民を收容保護するため、東京府知事大久保一翁（忠寛）の諮問に対する営繕会議所の答申「救貧三策」の一策として設置されたものである。この背景には、ロシア皇子の訪日もあった。事業開始の地は、本郷加賀藩邸跡（現東京大学）の空長屋であった。その後、養育院本院は上野（現東京芸大）、神田、本所、大塚など、東京市内を転々としたが、関東大震災後、現在地の板橋に移転した。養育院設置運営の原資は、営繕会議所の共有金（江戸幕府の松平定信により創設された七分積金が明治新政府に引き継がれたもの）である。

養育院の歴史は、渋沢栄一を抜きには語れない。営繕会議所は、共有金を管理し、養育院事業を含む各種の事業を行ったが、渋沢は明治七年から会議所の事業及び共有金の管理に携わり、養育院事業と関わるようになった。明治十二年には初代養育院長となり、その後亡くなるまで、五十有余年にわたり養育院長として事業の発展に力を尽くした。

養育院は、^{かん か こどく} 鰥寡孤独の者の收容保護から始め、日本の社会福祉・医療事業に大きな足跡を残した。特に第二次大戦後は、児童の保護や身寄りのない高齢者の養護、さらに高齢者の福祉・医療・研究、看護師の養成など時代の要請に応じて様々な事業を展開した。

平成十一年十二月、東京都議会において養育院廃止条例が可決され、百二十七年にわたる歴史の幕を閉じたが、養育院が行ってきた事業はかたちをかえて現在も引き継が

れている。

養育院に関連する碑は、ほかに養育院の物故者中、引取人のない遺骨を埋葬、回向をお願いした東京都台東区谷中の大雄寺、了侘寺、栃木県那須塩原市の妙雲寺及び東京都府中市の東京都多磨霊園にある。

なお、碑の「養育院本院」は渋沢栄一の墨蹟を刻んだものである。

平成二十五（二千十三）年 三月

養育院を語り継ぐ会

この碑は元養育院職員等の篤志によって建てられました。

地方独立行政法人 健康長寿医療センター

.....



なお、『明治5年(1872)、ロシア皇太子の訪日に際し、市中を浮浪者が徘徊するのは文明国の恥と考え、時の治安維持責任者が、浮浪者を集めて収容した・・・』という説が流布しています。しかし、近年、大久保忠寛（のち隠居名・一翁）が、江戸幕府の“蛮書調所総裁”であった安政4年に、七分積金の様な財政基盤による大規模な西洋版小石川

養生所の創設を提案（病幼院創立意見）していること、江戸開城の時、七分積金を明治政府に引き継いだ責任者が大久保一翁であること、かれが東京府知事になったとき、救貧策を諮問し、その答申の一つとして養育院が作られたことが明らかにされています。また、ロシア皇太子とあるのも、ロシア皇帝の3男に当たる人で、皇太子ではなく、後に日露戦争時のロシア海軍の最高責任者アレクセイであったことが明らかにされています。

渋沢栄一銅像のお引越し

明治 5 年 (1872) に、本郷の旧加賀藩邸の空き長屋を利用して養育院の仮施設が、翌 6 年 2 月に上野に恒久施設が作られました。渋沢は明治 7 年から、静岡の徳川藩で知遇を得た大久保一翁府知事から、共有金（七分積金）の取り締まりを依頼され、それ以来、養育院に関与するようになりました。しかし、財政基盤が定まらず、渋沢は必死に寄金を集めるなど、養育院の維持に努力し、明治 22 年にはその意義が理解され、東京市の経営となりました。その後は、名誉職吏員の養育院長として 41 年間、安達憲忠、光田健輔、入澤達吉らの活躍もあり、大塚本院を中心に社会事業は大きく発展しました。また、板橋への移転計画中の大正 12 年、関東大震災で大塚本院は壊滅し、急遽板橋に引っ越しました。板橋施設の建設が一段落したとき、養育院常設委員会（委員長は東京市長）は、市民の寄金で銅像の建設を計画しましたが、渋沢ご当人は、いやがってなかなか承諾しませんでした。

そこで、『この銅像は単に過去における養育院長としての、ご功績を記念しようと云うだけでなく、終始、渋沢の念頭を離れない養育院の構内に、百年の後も永久にこれを守護せんとする渋沢子爵の魂魄のため、定住所をお作り申し上げる意味もある……』と説得、『養育院のため……』と言う一言に初めて承諾されたといえます。

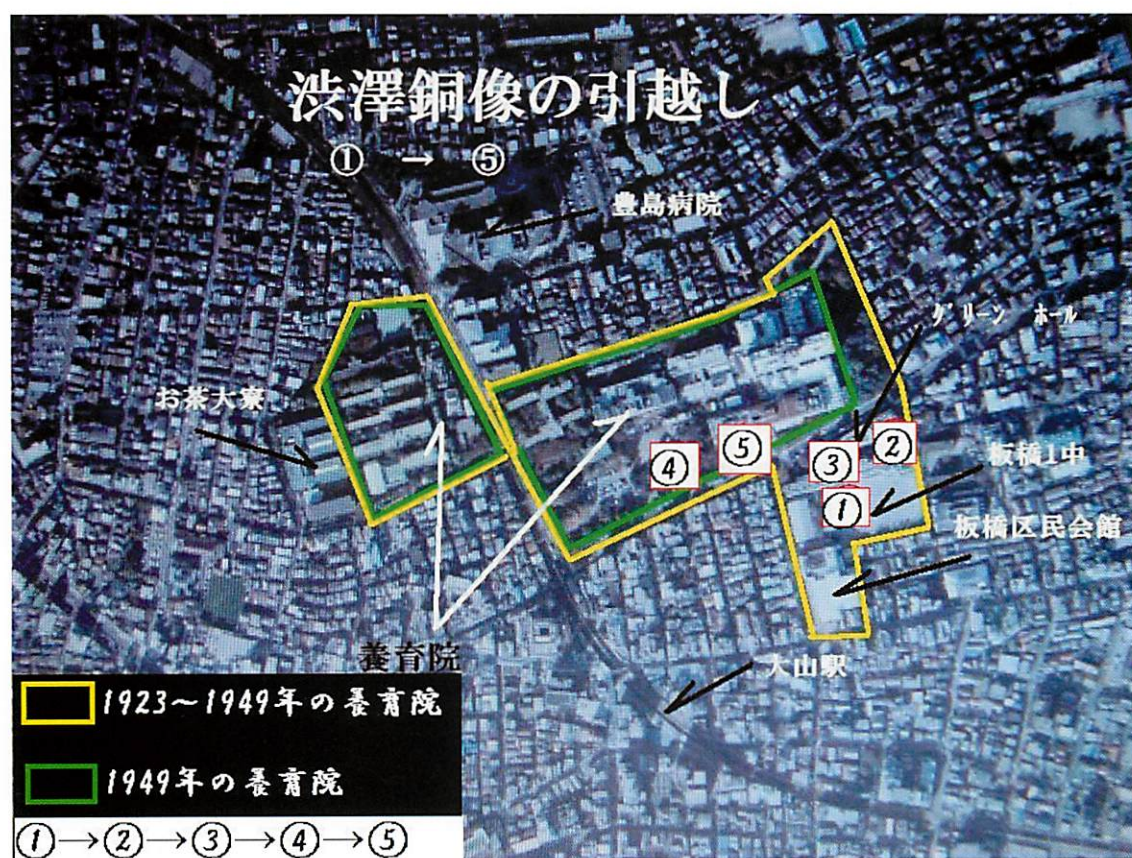


帝展・文展審査員の彫刻家、小倉右一郎の制作になる、高さ 16 尺 (4.3m)、方 20 尺 (5.4m) の花崗岩の台座に、高さ 10 尺 (3.75m)、重量 1.8 トン (480 貫) の青銅製で、フロックコート姿でソファーに座っています。大正 14 年、その落成式で、銅像を背にしてご本人が謝辞を述べている写真が、深谷市の記念館に残っています。銅像建設当時の板橋本院事務所は、現在の板橋第一中学校の校舎の辺りにあり、銅像は現在の体育館の辺りに、旧川越街道に向かって南に面して建っていました①。看護学校の卒業式などの記念写真の背景にしばしば利用されています。

昭和 16 年 (1941)、戦時の金属資源供出時にコンクリート像に変えられ、本体は供出予定で地上に降ろされていました。昭和 20 年 (1945) 3 月、米軍の B29 の東京大空襲で施設の 9 割が焼失、利用者 107 名の犠牲を出した中でこの像は残りました。

【養育院本院の戦後復興】 空襲で、建物の 9 割を失いながらも、養育院は機能を持続し、

復興の道筋が模索されました。練馬の軍用地や東村山への転地も含めて検討する一方、板橋区では独自に養育院移転を前提とした都市計画が進められ、養育院移転の区民運動が展開されました。この間様々な折衝が行なわれましたが、当時の占領下で、GHQ民政局のキャロー女子の鶴の一声で、板橋現地で存続に決着しました。すなわち、中学校、区施設、公園のための用地を区に売却し、残りの現在地に復興すると言うもので、昭和27年に新入寮が建築されました。この間銅像は校庭（現体育館）にありましたが、昭和30年（1955）に養育院官舎の西側②に移動、更に昭和32年（1957）3月30日、当時ご存命の作者、小倉右一郎監修で、現在の三角地に銅像は復元されました③。金属供出のため一旦降ろされて破損していたのを改修したものです。



施設の神様があまりにもみすぼらしい姿であると、昭和57年に、道路を隔てた④の場所に巨大な台座ごと、コロに乗せられて、交通遮断の中、しずしずと移動しました。周辺に、池や噴水のある広場が整備され、説明の看板がつくられ、銅像の作者、建立の経緯などが書いてありました。また、噴水池が作られ、中央に“よろこびの像”が造られました。（稲松）



灰色の渋沢栄一銅像について

渋沢栄一の銅像の色はもともとは左写真のように黒っぽいブロンズ色でした。

ハトの糞などで汚れ、痛みもあるため、平成 14 年 10 月に保護のための塗装工事が発注されました。当時、酸性雨の影響を受けにくく、汚れが付きにくい塗料を選んだ筈ですが、覆いを外したときその

白さに関係者は驚いたそうです。仕様書を見せていただきましたが、3 層に保護膜が塗り重ねられ、最上層は汚れの付きにくいフッ素系の保護膜が塗られています。色については、細かい指定はなく、灰色としか書いてありません。像の周りにはドバトが舞い、時に、はげたおつむに止まっていたりするので、塗装職人の判断で鳩の糞が目立たないようにしたようです。



【平成 25 年の引越しと本院碑建設】

平成 25 年 6 月開院に向けて、新施設が建設されました。敷地内の銅像は、東側に約 45m 移動されました。南向きだったのが、新施設を見守るように西向きに設計図が描かれました。設計図を描く人は図面の上でチョイト動かせばよいのですが、施行する人は大変です。

銅像を外して再塗装して元のブロンズ色にすることも検討されましたが、銅像本体の破損が予測されるため断念し、洗浄のみが行われました。

台座は削岩機で丁寧に解体、パーツ毎に移送、再構築されました。台座の高さは、昭和 57 年の移送時、底の部分を地下に埋め、約 30 cm 低くされた。この

ため、銅像制作者の意図よりも足が短く見え、創建時の高さに戻すことも検討されました。しかし、親しみを感じる低い高さのままだちつきました。



銅像の方向のようですが、大正 14 年、創建時、現在の中学校敷地では大山の通り方向の南に向いていました。戦時中は、台座から降ろされて、ボイラー室の横で金属供出を待っていたようです。昭和 32 年に、三角地で修復された後は、西向きに変えられました。そして、昭和 57 年に道路を渡って引っ越しをした後は、また、南向きになりました。

今回再び西向きになりました。新病院をにらむように西向きに、道路からも見えるようにやや斜めに構えています。西方浄土をにらんでいるわけではありません。



そして、養育院本院碑と、徳川家斉墓前の石灯籠が、一枚の写真の中に収まるようになったのです。
(稲松)



東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

葵の石灯籠

小公園内に、2 基の大きな石灯籠が据えられています。三つ葉葵の紋が彫り込んであり、徳川家ゆかりの石灯籠です。渋沢銅像の近く、スタジイの大木の下にある方をよく見ると、下のように彫られています。

奉献 石灯籠 一基
東叡山
文恭院殿 尊前
天保十一年庚子年閏正月晦日
豊後国佐伯
従五位下 伊勢守藤原毛利高泰



東叡山は上野の寛永寺のこと。文恭院殿は第 11 代将軍徳川家斉の戒名。天保十一年庚子年閏正月晦日。豊後国佐伯は、大分県。従五位下 伊勢守藤原毛利高泰

徳川家斉は天保 12 年（1841 年）正月 30 日に死去しています。大分県の小大名が、第 11 第徳川将軍家斉が亡くなったときに、寛永寺の墓前に奉納したものとなります。



もう 1 基、銅像から遠い方にあるのには右のように彫られています。

大猷院殿は、将軍家光のことです。

奉献 石灯籠
武州 東叡山
大猷院殿 尊前
慶安五年四月二十日
松平出雲守源勝隆

慶安五年四月二十日：一回忌の命日

松平出雲守源勝隆：天正 17 年（1589 年）、徳川家康の重臣・松平重勝の 5 男として生まれ、寛永 15 年（1638 年）、上総国佐貫藩主となって、1 万 5000 石を領しています。一回忌の時、寛永寺の墓前に奉納したということです。

家光は、徳川三代将軍（慶長 9 年～慶安 4 年 4 月 20 日：1604～1601）享年 48 歳。

遺骸は遺言により東叡山寛永寺に仮埋葬され、翌承応元年（1653年）には、日光の輪王寺に改装され大猷院廟が造営されています。

二つの徳川家の、寛永寺の灯籠は、様式は似ていますが年代が200年近くも離れているのです。

寛永寺にあった石灯籠が、どうしてここ板橋にあるのでしょうか……



徳川将軍は、初代家康と三代家光は日光に霊廟がある他は、上野の寛永寺と芝の増上寺を菩提寺とし、ほぼどちらかに葬られています。寛永寺には、四代家綱、五代綱吉、八代吉宗、十代家治、十一代家斉、十三代家定のお墓があります。芝の増上寺には、二代秀忠、六代家宣、七代家嗣、九代家重、十二代家慶、十四代家茂のお墓があります。十五代慶喜だけは、明治になって隣接する谷中墓地に神式で葬られています。

江戸時代、将軍が亡くなるとどちらかのお寺に霊廟が作られ、全国の諸侯が、墓前に燈籠を献上したようです。諸侯の江戸屋敷が、江戸の石屋に石灯籠を発注するので、江戸の石屋は大忙し。それはともかく、戦前の両寺には、数千基の石灯籠が林立していたそうです。

戦後増上寺は、敷地のかなりの部分をプリンスホテルに売却し、そこにあった燈籠は……寛永寺も、墓地の再開発で、行き場を失った燈籠の多くは、信州の鬼押し出しの寛永寺別院にあります。西武の堤康次郎の寄進で建てられたお寺です。その他の多くの灯籠が関東のあちこちに配られています。養育院長・渋谷栄一は旧幕臣、寛永寺関係者との交流は深く、一族の墓地も谷中にあり、明治の終わりには、寛永寺の檀徒総代を務めています。このことと板橋の寛永寺の燈籠の関係は歴史の闇の中……

今回の工事の前、椎の木の下にあったのは家光の燈籠で、恵風寮の前、新病院の建っているところに家斉の灯籠があったのです。今回それが入れ替わってしまいました。椎の木の下、養育院本院碑の後ろにあるのが、家斉墓前の燈籠です。

ところで、老中・松平定信は、11代将軍家斉が将軍になったときの初めの筆頭老中で、七分積金が制度化されたのは、家斉の治世と云うことになります。また、旗本・大久保忠寛が、初めて小納戸として江戸城に出仕したのが、家斉晩年のことであり、何かの時に、弓が上手と褒められたと書いてあります。彼はのちに、アメリカの黒船が来た時に、幕府の海防掛に抜擢され、蜜書調所総裁の時、西洋版小石川養生所の建設を提案し、明治になってそれを実現したのが養育院です。養育院にゆかりの2人が仕えた家斉将軍の、墓前に捧げる石灯籠が、ここにある不思議を感じます。工事関係者が意図したともおもえないのですが……（稲松）



櫻園通信 6. 平成 25 年 10 月

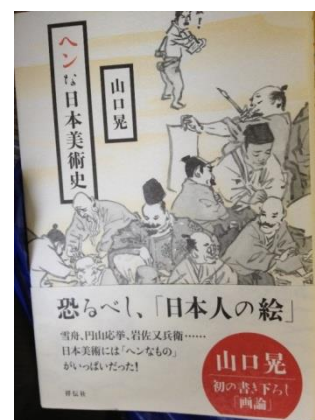
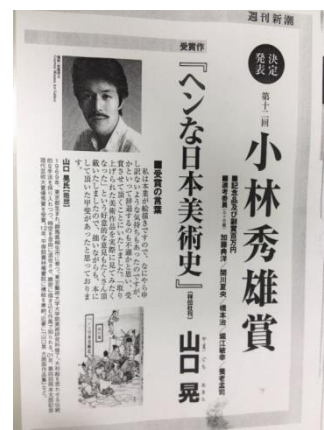
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター



★ 養育院幾星霜之圖 ・ 山口晃

東京都健康長寿医療センターは、本年 6 月、リニューアルオープンした。その玄関ホールに、山口晃の近作、【養育院幾星霜之圖】が飾られている。本郷→神田→本所→大塚→板橋と移転を繰り返した養育院の歴史をたどるとともに、現代の病院をユーモラスに描いている。鳥羽僧正の鳥獣戯画と洛中洛外図屏風を現代風にアレンジしたような絵図で、今売れっ子の若手、山口晃 <http://ja.m.wikipedia.org/wiki/> の手になる。彼は上野の東京芸大美術学部卒業であるが、この場所は、明治六年二月、上野の護国院の一部を買い取って、養育院の恒久施設が建てられた所である。しかし、幕末・明治のオランダ医、ボードウィンが、この一帯は公園や博物館に適していると言ったため、既に出ていた養育院は明治十二年に神田に追いやられ、立地予定の東大は本郷に行き、公園、博物館、学校などになった。明治二十二年に、養育院の跡地は東京美術学校となっている。彼は、絵をかきながらこのことに気付いた様で、(いまの芸大あたり。建て増したりしたが、博物館用地にするため追い出された)と絵の中に書きこんでいる。

その山口が平成 25 年度の小林秀雄賞を受賞した。優秀評論を対象とする賞であるが、著者の日本美術史に関する初評論が受賞対象となった。題して【ヘンな日本美術史】。早速購入して読んでみた。鳥獣戯画の 4 層構造。雪舟の画家としての冒険。洛中洛外図屏風の空間処理などについて、斬新な見解を述べている。最終章に、「やがて悲しき明治画壇」と小題を付けて、いわゆる近代日本美術史に登場する画家は割愛して、明治初期の画家、川鍋暁斎、月岡芳年、川村清雄を取り上げている。川村清雄は「最初期の洋行帰りの画家としてのみ取り扱われているのを惜しんで、その画業について述べている。



まったく偶然のことであるが、この川村清雄が書いた「大久保一翁」の油絵肖像画の写真を、センター2階の、「養育院・渋沢記念コーナー」に掲げており、その奇縁に驚いた。



このコーナーの準備に、養育院の黎明期のことを勉強していて、いくつかのことに気付いた。そのひとつは、養育院の成立に、大久保一翁が深く関与しているらしいことである。その調査のために、数年前にご子孫の大久保家を訪れたことがある。その際、玄関先で私を出迎えてくれたのが、この、日本における最初期の油彩肖像画であった。その時の思いもあってこの原稿を書いている。この画家は、日本で最も早い時期に欧米に留学し、西洋画を修得した人である。元は幕臣の旗本で、明治元年に徳川家と共に静岡に移住、明治四年に徳川家の給付生として渡米、大久保一翁の助言もあり、その後パリ、ベネチアで十年間西洋画を学んだ。この間、大久保一翁や勝海舟の子息、徳川家達らと交流している。帰国後は、大久保一翁、勝海舟の援助で画家として活躍した。

大久保一翁は、江戸幕末期に目付海防掛~蕃書調所総裁の時、七分積金による西洋版小石川養生所の創設を提案している。しかし、幕末期のごたごたで実現化せず、明治五年に東京府知事になって実現したのが養育院と東京府病院である。その歴史が【養育院記念コーナー】の展示パネルになっている。その川村清雄の作品群の中に、大久保一翁にたいしての感謝を込めた肖像画があるが、その写真が二階の【養育院・渋沢記念コーナー】に掲げているものである。大久保一翁の肖像画は、川村清雄による日本で最も早い時期の油絵の肖像画である。一翁の子孫の家にある実物の写真を、お許しを得て展示している。なお、慶応大学北里講堂に掲げられている福沢諭吉像も川村清雄による。一翁は福沢諭吉の慶応義塾用地の確保に協力しており、そのお礼の手紙の存在が知られている。養育院に絡む妙なご縁に驚いている。（文責：稲松）



【参考】 山口晃の作品群：

今様遊楽圖(2000年)、何かを造ル圖(2001年)、胎内巡り圖(2004年)、歌謡ショウ圖(2004年)、東京圖 獎墮不樂乃段(2001年)、東京圖 六本木屋圖(2002年)、階段遊楽圖(2002年)、百貨店圖 日本橋三越(2004年)、東京圖 芝の大塔(2005年)、成田国際空港 飛行機百珍圖(2005年)、ラグランジュポイント(2006年)、四季休息圖(2007年)、渡海文殊(2007年)、Tokio 山水(2012年)

櫻園通信 7. 平成 25 年 10 月

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター



よく知られた
養育院開設の一般的な説明。
しかし・・・

養育院のルーツ

養育院は、1872（明治 5）年にロシア皇太子アレクセイが来日する直前、街中に乞食等が徘徊するのを帝都の美観を損ねるものとし、外交上・治安上の理由で約 240 人の乞食・浮浪者を本郷の旧加賀藩邸に隔離収容したことから始まる。

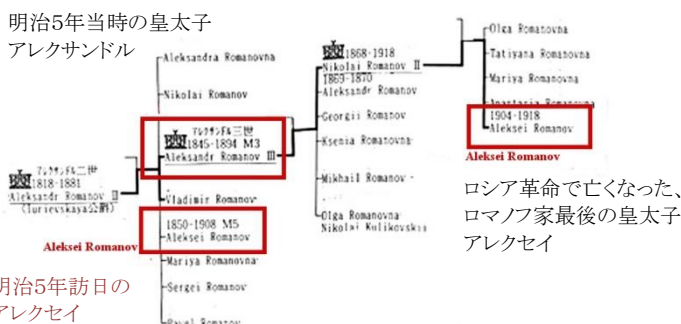
実は、明治 5 年訪日のアレクセイは
皇太子ではありません。

当時、ロシアの皇太子は、第 2 皇子アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ロマノフです。（長男ニコライは病死）。

来日したアレクセイは四男で、皇太子ではありません。

皇太子ではなく、皇子または大公（＝君子一門の男子）と呼ぶのが正しい表現です。

明治 5 年当時の皇太子
アレクサンドル



明治 5 年訪日の
アレクセイ

では、養育院は明治 5 年開設の
浮浪者収容施設から始まるという
説明はどうでしょう？

渋沢栄一の養育院長就任から
出発し、養育院前史をさかのぼっ
てみます。

院長渋沢栄一は、東京府議会やマスコミの養育院廃止論（財政圧迫、情民養成）という逆風の中、院の存続に奮闘。分院・専門施設を次々開設。91 歳で亡くなるまで、約 50 年間院長を務め、養育院事業を拡大していった。

渋沢栄一による
養育院事業の展開

養育院開設から 7 年後、渋沢
栄一が養育院院長に就任。

1879 (明治 12) 年

養育院の事務長は院長に改称。この職制改定で、渋沢栄一は養育院院長に。

1876 (明治 9) 年

渋沢栄一、養育院事務長に就任

アレクセイ大公訪日直前に浮浪者を集めて収容。
営繕会議所附属養育院と命名。

1872 (明治 5) 年

明治政府は共有金（＝七分積金）を管理する組織「営繕会議所」設立。

1869 (明治 2) 年

明治政府は、七分積金により貧民を収容する**教育所**を三田・麴町・高輪に設置。しかし、逃亡者が相次ぎ、費用の維持も困難で、明治 5 年に廃止。

渋沢栄一に引き継がれた
新・病幼院「養育院」。

大久保一翁（忠寛）の
「病幼院」プランは、
養育院として実現。

大久保一翁（忠寛）

1868(明治元)年

明治維新 幕府の実質的最高位(会計総裁 若年寄)であった**大久保一翁**が、江戸の困窮者救援資金**七分積金**を含む幕府の財産を明治政府に引き継ぐ。



徳川慶喜、静岡藩に蟄居。静岡藩中老となった大久保一翁、欧州帰りの渋沢栄一を呼び静岡藩勘定組頭に任命。

1867(慶応3)

坂本龍馬は、大久保一翁の大開国論より「船中八策」を作成。西郷隆盛らに大政奉還論を説く。船中八策を基にした山内容堂「大政奉還建白書」により、将軍徳川慶喜大政奉還を朝廷に奏上。

1864(元治元)年

大久保忠寛、家督相続し、**大久保忠寛、一翁に改名。**名を**一翁**と改める。



1863(文久3)年

大久保忠寛、屋敷を訪れた土佐浪人5人。そこで忠寛の大政奉還論を聞かされ、深く感銘をうけた浪人が、坂本龍馬。

幕府の中で大政奉還論(諸侯会議・公議政体論)を唱えた大久保忠寛、幕末の混乱の中で、左遷と登用を繰り返す。

大久保忠寛



1857(安政4)年

大久保忠寛(目付・海防掛・蕃書調所総裁)、平山敬忠の素案を加筆修正した、「**病院**」創立意見を幕府に提出。しかし直後に忠寛は長崎奉行に任命されるも拒否。左遷させられる。西洋の社会救済制度を参考にした病院プランは実現せず。

1853(嘉永6)年
黒船来航



幕末開港後、欧米諸国の重圧を感じる幕府は、オランダ以外の各国語(とくに英語)による洋学の必要にせまられた。洋学の中心機関として蕃書調所が設置され、外交担当官の養成・洋書翻訳・海外事情の研究が盛んに。

幕末、大久保忠寛により「西洋式の貧院・病院・幼院」の知識が、具体的な新施設プランとして浮上。

オランダ語による蘭学から、英語をメインにした洋学へ

1790(寛政2)年

松平定信(老中)、江戸の貧窮者の保護資金積立制度「七分積金」発足。

職方外紀により日本に伝わった西洋式の貧窮者保護制度「貧院・病院・幼院」の知識

1700 年ごろ?

職方外紀が日本に渡来。鎖国体制の中で禁書とされたが、西洋の知識に飢えていた人々は争って本書を伝写し、蘭学者の間に、政治・学問・教育・福祉の理想形としての西洋観が広まる。ヨーロッパの社会救済制度を解説した記述にある「貧院」「幼院」「病院」という言葉は本書によって蘭学者の間で使われるようになった。現代の日本で使われる「病院」という言葉はここから。

1623 年



イエズス会士のイタリア人艾儒略(Giulio Aleni, 1582-1649)が編纂した世界地理書「**職方外紀**」、明(中国)で刊行。



健康長寿医療センターの敷地に 板橋競馬場があった頃

大沢鷹邇 養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア

健康長寿医療センターの裏(北側)の崖沿いに、一方通行路があります。この通路にほぼ並行して、敷地内にかつて板橋競馬場のトラック(走路)がありました。今は跡形もなく消えた幻の競馬場です。



図1 板橋競馬場を描いた明治45年の地図

走路は崖上に直線部があり、区立大山公園の北端部から半周して傾斜を下り、当時蛇行していた石神井川を除けて低地に直線部を設けていました。

1周1600mの楕円形の走路は、東上線のガード付近から再び半周して傾斜面を先ほどの崖上に戻りました。

明治45(1912)年発行、東京通信管理局作成の「東京市及び近傍町村番地入地図」に板橋競馬場が鮮明に描かれています(図1)。明治時代の終わりのころの板橋町の姿を伝えています。

大正3(1914)年開通の東上鉄道(現 東武東上線)や同年開院の養育院板橋分院(現 都立板橋看護専門学校)は、まだありません。

同図には、元禄9(1696)年開設の千川上水と江戸時代以来の小松屋横町道が描かれています。千川上水は昭和6(1931)年ごろに暗渠になるまで養育院の敷地内を通過する清流でした。

正門側の事務棟と北側の病棟の間に上水の清流が流れ、医師・看護師は事務棟から屋根付きの橋を渡って直接病棟に行くことができました。建物の外には別の橋がありました。



図2 昭和12年測図の地形図に、明治42年測図の板橋競馬場トラックのみを加筆

小松屋横町道は板橋区仲宿の酒屋小松屋の脇道が名の由来と言われています。大正12(1923)年、養育院本院が大塚から移転してきたとき、院内病棟を東西に横切っていた小松屋横町道を裏の崖際に付け替えました。現在、小松屋横町道は、板橋第一小学校前を通過して大山公園に突き当たり、右(北)に迂回し、崖沿いを行き、東上線に出たところで再び昔の小松屋横町道の踏切(第17号踏切)に出ます。

第1図を改めてみると、競馬場の走路は小松屋横町道に近接し、ほぼ並行に走っています。つまり、走路は現在の一方通行路と、旧小松屋横町道の間を走り抜けていたわけです。当時トラックの柵は目隠しは無いと思われるので、小松屋横町道を歩く人のすぐ脇を競走馬が駆け抜けていたことになります。石神井川寄りの低地にあった馬見所でみるよりも余程迫力があつたことでしょう。

板橋競馬場については「久保田遺跡」発掘報告書に荒木正彦氏が詳報しています。氏の記事を引用し・参考させて頂き、以下にあらましを記します。

日露戦争(1904-05 年)を通して日本の軍馬の不足、質の貧弱さが指摘され、その対処法として競馬の有効性が説かれました。

そこで明治 39(1906)年東京競馬場が池上を馬場として設立されました。同年 11~12 月に第 1 回のレースが開催され好評を博しました。こうして 1~2 年後には 200 を超える倶楽部設立の申請書が出願されました。板橋競馬場もこんな状況の中での誕生です。明治 41(1908)年春の時点で、東京付近で馬券を発売して開催された競馬は、東京競馬会(池上)、日本競馬会(目黒)、京浜競馬倶楽部(川崎)、日本レース倶楽部(横浜)、そして東京ジョッキー倶楽部(板橋)の 5 か所でした。

東京ジョッキー倶楽部には、明治 40 年 8 月に設立の認可が下りていましたが、馬場工事の遅れで開催できず、翌年に順延となりました(図 3)。板橋競馬場第 1 回は明治 41 年 3 月 28 日から 4 日間開催されました。内 3 日間が雨天となり、馬場が重く交通不便等の悪条件にもかかわらず、入場者は相当多く、出場馬と興味ある番組により観衆を熱狂させ、予期以上の成績であったといえます(「日本競馬史」第 3 巻)。

その後、7 月に 4 日間、12 月に 3 日間開催したのを最後に板橋競馬場はわずか 1 年足らずで役目を終えました。

明治 43(1910)年、政府の方針で東京近辺の 4 競馬会(池上、目黒、板橋、川崎)は整理統合され、同年 5 月に東京競馬倶楽部を設立し、唯一の馬場を目黒(後に府中に移転)に定めました。…以上荒木氏の文章から。

図 1 の地図が発行された明治 45 年、板橋競馬場は統合された後で、その跡地が残されていました。明治 45 年 7 月 30 日、時代は大正に変わりました。

大正元年、養育院板橋分院(現 都立板橋看護専門学校)の敷地の取得が決まりました。分院敷地の北東寄りには、板橋競馬場のトラックがカーブしながら崖上から傾斜面を下りていた部分でした。分院も競馬場の跡地を利用していました。

板橋競馬場の跡地は、分院のほか、東上鉄道(現 東武東上線 大正 3 年開通)、愛光舎牧場(大正 2 年 巢鴨より移転)、豊島病院(大正 7 年 現板橋第一小学校の近くから移転)、養育院本院(大正 12 年 大塚から移転)など、公私の大規模施設の開設・移転先に活用されました。現在は介護・医療・教育施設の一大集積地に発展しています。



図 3 都新聞 明治 40 年 8 月 31 日版
「久保田遺跡」から



図 4 板橋競馬場勝馬投票券「馬の博物館」所蔵



なお、板橋競馬場については、板橋区立郷土資料館の特別展「板橋と馬」にて勝馬投票券(図 4)の実物が展示されています(平成 26 年 1 月 25 日~3 月 23 日)。

同展図録には同館学芸員齊藤千秋氏が板橋競馬場の誕生と終わりを詳しく語られています。

養育院史

140年にわたる養育院の歴史の中で、60年史・70年史・80年史・100年史・120年史が編まれている。

60年史は昭和8年発行。渋沢栄一生前に発行が目指されたが、間に合わなかった。大部で、よく基礎資料が上げられている。関東大震災で、渋沢栄一が集めた元の資料が失われており、以後の養育院史のはじめの頃の記載は、おおむね本書による。難は、渋沢死亡直後の出版であり、渋沢色が強い。

昭和18年発行の70年史は、60年史以降の記載が主であるが、冒頭の60年史の概略の中で、江戸期の社会福祉史を引き継ぐものとしての位置づけが明快で、七分積金の使い方を、大久保一翁知事が心配して、救貧策を営繕会議所に諮問し、三策の答申を得、その実現、養育院建設に動いている様が記載されている。その部分の原文を以下に示す。(稲松孝思)

東京府知事
大久保一翁



第一編 六十年史梗概

第一編 六十年史梗概

江戸時代の社会事業 養育院は明治五年十月の創立と稱するも一面江戸社会事業の明治時代に於ける復活とも見ることが出来る。抑々近代の社会事業は都市發展に附帯して必然的に發生せるものにして、東京市の社会事業特に養育院事業はその始源を遠く江戸なる都市發展の中に之を求めることが出来る。即ち養育院事業の始祖と仰ぐ松平樂翁公時代の江戸社会事業の中にその萌芽を見、例へば備荒貯蓄の程蔵並に江戸町會所七分積金を初じめ釋放者保護事業とも見るべき石川島の人足寄場等の創立は、曩に八代將軍吉宗時代に創設せられたる今日の貧病院たりし小石川御藥園内の養生所等と相俟つて江戸都の社会事業に一座の整備を見せ、更に淺草と品川の兩所には非人溜が設けられ、非人無宿の徒を收容する等、夫々府内の保護者を救助し、一應濟貧の實を擧げ江戸市内の秩序を保つて來た。殊に町會所は今日の町會事務と救濟事務を擔當し、江戸の町法を改正して剩し得たる有名なる七分積金を繼續管理し、備荒のため糧を貯藏し、窮民の居宅救助、低利資金の貸附等の自治救濟事業を行ひ、明治政府に引繼がれたる資産のみにても百四五十萬兩の多額に上れるより見れば、江戸時代にとりては實に歴史的に誇り得べき大なる社会施設の一であつた。

然るに幕末より明治維新への社会變革は、これ等の施設を或は破壊し或は無機能たらしめ、一時的なりしも市内の社会事業は潰滅に瀕した。かくて新東京には窮民浮浪者類に増加し「窮民街衢に泣き、餓殍道途に横はる」の慘狀を呈したといふは、敢へて誇張の修辭にあらずしことが容易に想像される。

養育院の創立 明治二年時の有司之を捨て置く可からずとなし、當時莫大の資金を有しつつ、その活動機能を停止しむる町會所に命じ之を救済せしめた。三田薩摩邸跡、舊町紀尾井町の教育所は即ち之である。然るにこの教育所は一時的のお救小屋式施設にて間もなく廢止せられ、町會所も亦營繕會議所と改められて土木架橋等の公共事業を營むこととなり、市内の救貧問題は依然として未解決のまま放置せられてゐた。ここに於て時の東京府知事大久保一翁氏は大に之を憂慮し、明治五年九月その救濟策を營繕會議所に諮問した。當時會議所は市内の有力者より選ばれたる委員によりて運用せられゐるが、所謂町會所以來の社会事業的經驗により、左の如き適切な三策を獻議した。世に有名な救貧三策にして 即ち

一、工作場の設置(授産場) 二、日雇會社の設立 三、窮民救濟施設の設立

の三社会施設の設立方策にして、これは當時の東京市有司の社会事業に對する最高認識を示すものとして今日尙頗る興味深いものもあるも、幸ひにこの三策は悉く府當局の納むる處となり、夫々實現の計畫中なりし處、偶同年十月露國皇子の來遊あり、東京は帝都の體面上、市内に多數徘徊する浮浪乞食の徒を一定の場所へ取集むるの必要に迫られた。

ここに於て東京府は營繕會議所に命じて取敢へず本郷元加州邸跡空長屋を臨時收容所とし、同年十月十五日より十九日迄市内に徘徊する浮浪乞食の徒を集めて同所へ收容せしめ、その取扱方を淺草溜(舊幕時代の病囚經罪囚及び釋放者等の保護所)の非人頭たりし車普七なる者に囑した。これ即ち本院の濫觴にして、その間收容者老

幼男女を合して二百四十二名の多数に上つた。而してこの十五日を以て養育院の創立記念日とする所以蓋しここに存する。然しながら未だ常備の施設なき爲、一先づこの收容者を浅草溜に預けることとなり、十九日移轉を行ひ、車番七によつてその保護をなした。後に常設の收容所を上野護國院内に設立し、浅草溜の收容者を移轉すると共に、明治六年二月四日より新しく收容を開始し東京府養育院と稱した。かくて名實兼備の養育院は生れた。而してその所要經費は前述せる通り松平定信公の創始にかかる七分金で以て支辨せられたるを以て、遠く本院事業を樂翁公に由来するといふ所以がここに存する。

事業の發展擴張 かくして會議所々管の下に開始せられたる東京府養育院は、同九年九月會議所が其の事務を東京府に引継ぎたる爲、爾來府知事の直轄に歸したるが、終世本院事業に盡忠せられたる淺澤子爵が本院長の職に就きたるは實に明治七年のことにして、偶々幕府當時の學知たりし大久保一翁氏より會議所共有金の取締を委任せられたるに端を發する。

然るに明治十六年東京府會に於て養育院は十七年度限り地方税支辨を廢し、その經營は府の直轄を離れ委任經營とするの議可決せられ、爾來淺澤院長等により維持經營せらるるに至りしが、明治二十二年四月東京に市制の施行せらるるや、府會の決議により翌二十三年一月一日より市へ引繼がれ東京市養育院と改稱、今日に至つてゐる。本院設立の當初は現に市内に貧困する乞食の徒を收容するに止まりしが、漸次市内居住の窮民救助をも行ふこととなり、尋で明治十六年一月よりは事業を擴張して東京府下の行旅病人をも併せ救療し、同十九年三月に至りては更に東京府下の棄兒、遺兒、迷兒をも救育し、同二十三年には郡部の窮民をも受託收容するに至り、又同三十三年七月には新に感化部をも附設して市内不良性兒童の感化事業を開始する等事業の範圍は漸次擴張せられた。

又明治末期より大正初期に於ける社會問題發生の時期に入るや所謂近代的社會事業たる職業紹介所或は無料宿泊所、市内浮浪兒童の保護所等を創設して、後の東京市社會局所管事業の端緒をも開き、越えて昭和年度に入り劃期的社會立法たる救護法の昭和七年一月一日より實施せらるるや、府市の該法者を收容し愈々新界に重きをなすに至つた。

次に施設擴充の跡を見るに本院は明治六年二月上野護國院に移り創始期を遂げるが、同敷地が博物館敷地として入用となりし爲、同十二年十月には神田和泉橋の元藤堂藩の上屋敷跡に移りしも、明治十八年度以降地方費の支辨が廢せられて事業縮少の止むなきに至り、同地の敷地建物を賣却、本所長岡町に移轉、然るに明治二十三年一月より東京市營となり次第に事業の擴張に伴ふ收容者の増加は遂に收容場舎の狹隘を告ぐるに至り、明治二十九年三月小石川區大塚辻町に新築移轉、非常なる整備發展を見たが、同地がいつしか廢版の巷と化し建物亦腐朽破損夥しきに至り、大正十二年府下板橋町の現在地に新築移轉して、今日に至つてゐる。

次に明治二十七年、八年戦役前後に涉り東京市内に夥しき不良兒童輩出し、是等兒童にして本院に收容せざるもの尠からざる結果、在來收容中の孤兒等にして漸次感化の傾向を生じ、之が防止策として特別教育機關設置の必要を認め、明治三十三年七月院内に感化部を設置、我國感化事業の先驅となす。後ちに別置の必要を認め、時府下武蔵野村井之頭御料地の一部を拝借の上、感化部の新築に移り、三十八年九月竣工、東京市養育院感化部井之頭學校と稱したが、同校の敷地借用は後に井之頭公園の東京市への恩賜の端緒を作つてゐる。

次に本院收容の兒童は多く入院前の環境の影響に依り發育不良者又は虛弱兒童少なからず殊に明治三十年前後に在院兒童にして肺結核に仆れるもの甚だ多きに上りしを以て、明治三十三年七月千葉県勝山町に臨海保養所を設け病弱兒童の轉地を試みたが、其の成績良好なるに鑑み、明治四十二年四月同縣船形町に安房分院を創立、病弱兒童の療養を兼ね小學教育を授け今日に至つてゐるが、世界最古の養護施設として廣く知られてゐる。

又本院創立以來入院者の増加に伴ひ、兒童の入院者少からず、既設の收容場舎のみには漸次狹隘を感じるに至れるのみならず、是等兒童を成人收容者と同じ場所に收容するはその教育上に及ぼす悪影響甚大なるものあるを以て、之が別置の必要を感じ、明治四十二年三月府下北豐島郡西巢鴨町に兒童收容所を新設し、巢鴨分院と名付け、本院收容中の健康兒童を之に移して幼稚園並に小學課程の教育を施すに至り、一應養育院の兒童保護の態勢は整備するに至つた。

前記安房分院は結核兒童の療養所として設置せられたるも大人の結核患者の入院極めて多く大正三年十月東京府北豐島郡板橋町にこれが専門の療養所を設置、板橋分院と稱した。同施設はその後、東京市の野方療養所創設せられ、加ふるに大正十二年九月大塚の本院が同分院隣りに移轉し來り、以來分院として獨立の取扱ひをなすの理由薄弱となりしが、設立當時は市立野方療養所に先驅せる帝都唯一の療養施設として大きな歴史的役割を果して來たものである。以上の如く一本院の外に三分院一學校を有する程の發展擴充を遂げつつ六十年史時代を終り、最近十年の改善整備時代に入るに至る。

